
中途半端な少年の全力ファンタジー

寒桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

中途半端な少年の全力ファンタジー

【Z-コード】

Z9032Z

【作者名】

寒桜

【あらすじ】

交通事故によって全てを失ってしまった俺はこの世界から別の世界に行くことにした。これは逃げじゃない！ただ魔法とかに興味があるからなんだからね！

プロローグ

世界中には少なからず、いま何故ここに自分がいるのかと思う人がいるのかもしれない。

自分がいなくても世界はしっかりと回るし、狂いも迷いも何も生まれない。

だったら今この場で自分がいなくなつても別にいいんじゃないかと考えるのだろうけど、本当に消えたいと実行する奴は更に少ない。家族だつているし、この先の人生に何か起きるかもしれないなんて考えてる人もいるだろう。

本当に絶望したり挫折しないかぎり人は、限りなく前を向いて進んでしまうものだ。

自分が前を向かずとも、おのずと足は勝手に進み、気づかぬ内に成長していく。

それが全力であれ中途半端であれ、人は成長する。

まあ、何が言いたいかというとそんな中途半端な人生を進んでいた俺はある日、絶望に落ちた。

そして、前に進んでいった。

そして、自分がいなくてもいい世界から消えた。

第1話 会話

12月27日。

年末行事のサンタのオッサンがイスランドに帰国し、初日の出が登場の準備に取り掛かっているなんとも中途半端な日にな。
受験生の俺は自分の身の丈にあつた偏差値より若干高い高校の入学試験に向けて、ダラダラとコタツの中で年末番組を見ながらせと勉強に励んでいた。

見ている番組は今年放送されていた刑事モノのドラマの再放送であり、犯人と刑事が断崖で対峙していた。ああやつぱミステリーやサスペンスのラストは断崖だよなー森やビルなんて邪道だぜ。なんて考えていると母さんが居間のドアを開き入ってくる。

「逸弥。アンタまたコタツで勉強して、そんなので頭に入るの？」
「きゅーけい、きゅーけい。詰め込みすぎると逆に分からねえんだよ。あでっー？」

「何言つてんのよ。アンタそれさつきも言つてたじやない」

「ぐおおお……だからって息子の頭を鞄で引つ叩くなつて、あ？
鞄？」

よく見れば母さんの格好は前買つたブランクの鞄を手に余所行きの服を着ていた。

「アンタも準備しなさい。お父さんが町内会の福引で中華店の招待券を当てたんだって。だから皿で食べに行くのよ」
「まじで！？ 満干全席つー！」

満千全席ではなかつたがそれなりに美味かつたエビチリや麻婆豆腐に舌づつみした後、父さんの運転する車の後部座席で外をボーッと眺めていると歩道に誰かが立つていた。

すれ違つたのは一瞬だつたがスッポリと被つたフードからチラリと金色の瞳が見えた。外人か？ と似合わず思考にふけつていると急に対向のトラックがこつちに突つ込んできた。慌てて父さんがハンドルを回す音と、母さんの悲鳴、そして眩し過ぎるトラックのライト。

一台の車が衝突し中にいた俺はその衝撃で思いつきり窓に頭をぶつけ、

そこで俺は意識を失つた。

田を覚ますとそこは何も無い真っ白な部屋だつた。

いや、何も無いというのは語弊かもしてない。正しくは扉しかない空間だつた。

田の前には一般家庭によくある、外装のない在り来たりな木製の

扉。後は真っ白の俺と扉しかない世界。部屋なんて四方を囲む壁なんて見当たらなく本当に扉しかない。

「……三途の川にしては大胆だな
「三途の川か、良い例えじゃないか」

突然、後ろから幼いまだ声変わりもしていない子供の声が聞こえた。背丈は大体130前後といったところか、後ろにいたそいつはあの時すれ違つたときに見たフードを頭から被り俺と向き合つよう立つていた。

「やあやあ、中途半端なお兄さん。こんなにちはに創めまして。そしてこれからどうぞ宜しくもんばんわ」

「お前あの時の、つて中途半端つて俺？」

「そうだよ。俺と君以外ここには誰もいないよ、中途半端なお兄さん」

「いいつて、お前はここがどんな所か知つてるのか？ つーか中途半端言つな」

「まあ知つてるちゃあ知つているし、分からないと答えれば分からない事だらけの所だね。それより中途半端なお兄さん、君つて結構冷静だね。普通なら喚いたり泣いたり叫んだりすると俺の感性では思つよ」

「……別に、ただ死んだって実感がないからシックリしないんだよな。だから中途半端つて言つな」

何なんだこいつは、いきなり出てきて人を中途半端呼ばわりしゃがつて。確かに俺は今まで勉強も部活も生活も全力でした覚えはねえけど、だからって見ず知らずの子供にそれを言われる筋合いはねえよ。それよりもあー畜生！ やっぱ死んだのかよ俺。まだ15歳のピッヂピッヂだってのに、まだピンク色の高校生活をエンジョイし

てねえのにー まだ彼女できてねえのにー まだ童貞なのにー

「まあそりゃあそりゃだよね。だつてお兄さんはまだ死んでないもん」「……は？」

「おーおー、どうしたんだい。折角君の希望道理に中途半端を消したのにそんな反応しか返せないのかい。やつぱり中途半端だねお兄さんは、はー！ もう中途半端は取り消せない」と。やつぱりお兄さんは中途半端でこその兄さんだからね」

「おー、ちゅうと待てよ……死んでないってどうこいつだよ」

「文が道理に現状道理、中途半端なお兄さんはまだ死んでもいい生きててもいい。また生と死の中途半端な中間地點に今いるんだよ」

「じゃ、じゃあ。まだ……生きられんのか？」

「まあそうだね。生きられるといえばこのドアは現実世界に行けるし、死にたいといえば天国にも地獄にも連れて行つてくれるよ

「どうちなんだよー？」

「あーもつ意味が分からねえよ」イツも此処も！ 何だよ死にたいつて、生きられるんなら生きたいに決まつてんじゃねえか！

「さあどうなんだろ？ わたしは君だし、俺は話すだけだし」「わつぱり理解できねえけど……つまり俺が生きたいって望めば俺は生きられるんだな？」

子供は頭を縦に振つた。

「だつたら俺は生かしてもいい。まだ簡単に死にたくないんでな

「これ以上此処にいても更に頭を悩ますだけだ。俺は生きると思つ

ながら扉を回す。すると案外軽かつたそれは簡単に開き、白い光が開いた扉の隙間から溢れ出して来る。

子供は俺を引き止めようとしなく、ただ出て行く俺を見ているだけだった。

「うん。まあそりだらうと分かってたしね。それじゃあ中途半端なお兄さん、今度は絶望した時に会おうか」

「は？」

その言葉を聞いた瞬間、また俺は意識が途切れた。最後に見たのはフードの中でニッコリとした小さな口だった。

目を覚ますと真っ白な天井が見えた。

第2話 絶望と希望

あの後、俺が目を覚ましてから一ヶ月が過ぎた。

死んだと思ったあの夜、丁度通りかかったサラリーマンの通報で俺は意識不明の重体のまま病院に運ばれた。両親が事故すでに死んでいたと聞かされたときはまた意識を失うんじゃないかと思った。どうやらあの事故はトラックの運転手が居眠り運転をしたのが原因だったらしい。目を覚ました日の三日後、運転手の遺族が俺に頭を下げるに来た。運転手も俺の両親と同じく事故で死んだらしい。桜の舞う暖かい日だった。

五ヶ月。

俺が意識を失っていた時間に新年が明け、受験が終わり、新入生や新社員が和気藹々と過ごしていた。

もちろん俺は受験なんて一つも受けていなく、中卒のまま社会に放り出されたことになる。

それまでに俺は寝たきりだった体のリハビリを病院で行える間に何処か働き口がないかと懸命に探し回った。既に他界した両親に親族はない。文字通りの天涯孤独の俺に高校に行けるだけ金はまああつたが高校にいったとしてもその高校三年間に使い切ってしまう可能性が高い。

そして、結局俺はいい働き口を得られないまま無事に退院することができ出来ちまたコンチクシヨー。

しかもローンを組んでいた我が家は立ち退き、今は駅から一時間のおんぼろマンションだぜコンニャロー。

何處も不況で手が回らないらしく、今日も就職活動に失敗した。

現在75件目。

スーパーで値引きのされた商品を購入し、街頭に照らされた帰り道を歩く。

夏も終わりを告げ、冬の到来を告げる木枯らしが道を通り抜けた。

気分はまさに最悪の絶頂。もつ落ちる所がない程までに鬱だつた。

「やあ、中途半端のお兄さん。また会えたね」

突然、あの白い所で聞いた声がまた後ろから聞こえた。振り返れば予想通りにフードの子供がいた。街頭に照らされたフードはその光さえも吸い込んでしまった。うなほどに黒く暗い色をしていた。

「お、お前……夢じや、なかつたのか……」

「夢じやないや、現に俺は此処にいるし君もいる。それに帰り様に言つたでしょ『今度は絶望した時に会おうか』つて。どう中途半端なお兄さん、今君絶望してる？ してるよな、してるんだからこんな陰鬱な所でトボトボ歩いているんだし」

「うるせえーよガキ。今俺は最高に不機嫌なんだよ殴られたくなかったら消えろ。てめーに会つてから不幸しか起きねえんだ」

「おー恐い。まあまあ聞いてよ中途半端のお兄さん。そんな絶望の貴方にビッグなチャンス！」

「……あ？」

「……」ではない世界に行つてみたいと思わない？

「……ッ！ 寝言は寝て言えつ、こちちはただでさえ苛立つてんだよ！」

俺はガキの胸倉を引っつかみ、拳をその見えない顔面にかます。ミシッと耳障りの悪い音が奏でられ子供が三度地面を跳ねる。

「あ

やつた後に後悔をしたのはいつまでもない。頭に上りきつていた血液は一気に冷め、自分のやらかした最低な行いが嫌でも頭にリピートする。

「お、おー……大丈夫、か……？」

路地に倒れたままピクリともしない子供に慌てて駆け寄り触れようとした瞬間、その姿が霧のよつに消えた。

「まつたくもつて短氣なんだね中途半端なお兄さんは。まあ仕様がないか、うん」

「あ、お前……今どうやって」

「このまにか消えた子供は後ろのポストに腰掛け俺を見下ろしていた。

「今は消えたかどうかなんて僕とあなたには関係ない。もつ一度聞くよ。こんな世界で何もできないまま一生豚のように怠惰に過ぎるが。夢と希望のファンタジーに満ち溢れたワクワクドキドキのワンドーランドで大冒険をするか」

「行けるのか？ やこに俺が」

「馬鹿馬鹿しい。そう思っていたはずなのに自分の口から出た言葉は真逆の言葉だった。

いや待て待て。俺は一体何を、第一にそんなフィクションみたいなことがあるもんか。

「行けるよ。嘘でも夢でも偽りでもない現実的に君は行ける」

分からぬ。

なんでこいつは俺にそんなことをしてくれ。なんでこいつの言葉に俺は耳を貸しているんだ。こいつはあの白い部屋と事故のとき以外

「言つておくけどあの事故は僕が起こしたんじゃないし、僕がいくつもあの事故は起きていたよ」

「なつ……！」

こいつなんでまた俺が考えていたこと

「別に僕は心を読んでいるわけじゃないよ。君の顔にそう出てるんだもん。分かりやすい。んで、どうするの？ 行く？ 行かない？ 諦めてグダグダの人生に精を出すかい？」

分かつてゐる。

「」の子供の言つてることは支離滅裂だし、本当にわけが分からん。ワクワクドキドキの冒険？ 馬鹿らしい。くだらねえんだよ。ボケ

も休み休み言え。

分かつてんだよ。そんな夢物語なんてガキしか信じねえし信じたくなえ。

なのになんでこんなに胸が躍るんだよ！ なんでこいつの言葉を信じたくなるんだよ！

分かつてるんだ。自分のことは自分がよく知ってる。嘘でも夢でも偽りでも騙されているかも知れなくても俺は行ってみたい。

こんな世界を抜け出して、こいつが言つその世界に行つてみたい。冒險をしてみたい！ 人生を楽しみたい！ 夢と希望に満ちた世界で生きてみたいんだ！

「……行く！ 行つてみたいんだ！ 俺を連れて行ってくれっ！…」

「いいよ。じゃあ行こうか

あまりにもあっさりとポストからひよい、と降りると子供は手を叩いた。乾燥した夜の空気に音が響き渡り、また静寂が夜を包むと同時に子供の隣に赤と白が入り混じった扉が現れた。

「ああそっそう。未練があるなら今のうちだよ

未練か……サクラと八雲に会えなくなるのはちよつと寂しいかもな。 それでも俺は、

「……これといつてないな

さあ行くとするか。こいつの言つワクワク大冒險とやらに。

「あ、僕は一緒に行かないよ
「へ？」

まずは序章。よつやく世界が廻る。

彼が動く気がなくとも来るべき時には嫌でも彼の周りが彼を動かすんだろうね。まあそれまでは楽しんで貰うとしよう。

世界は廻るんだ。ゆっくりとゆっくりと風のように三のよつて静かに音もなく。

さて、僕もまた動き始めようか在るべき為に。

第3話 洞窟での談話

赤と白の入り混じった扉を開けるとその先は洞窟だつた。ところどころに青く光るロウソクが立て掛けられ、薄暗く洞窟内を照らしていた。子供が俺の前を歩きズンズンと洞窟の中を進んでいく。「これから君の行く大冒険の世界はファンタジーいっぱいの魔法の世界つてやつでね、竜とかのモンスターもあふれんばかりいる所だよ」

「魔法ねえ……まあ楽しみにしてるよ」

「ありや？ なんだかさつきより角が取れた話し方じやないか。それともこれが君の『テフオ』なのかな？」

「まあな。さつきはガラに行く超苟立つていたんだ。まったく情けない。殴つてしまつて『ごめんなさい』」

「へー、反省してゐようだしまあさつき殴つたことは水に流すとしよう。それで君はその世界で冒険をするのも戦つのもよし。まあ自由にしてくれよ」

「時期が来るまでか？」

「？ なんのことだい？」

「いや何でもない」

「ふふふ、やつぱり君は面白いね。楽しくてワクワクする。大丈夫、魔王と戦えとか世界を救えなんて言わないよ」

「おおー！ そいつはありがたいー！」

「うわつわざとらしい」

「どつちがだつ！」

洞窟の中は大人一人がギリギリ入る程度の大きさでもうかれこれ一時間は歩いた。だがまだ出口にはたどり着かない。青かったロウソクの火が次第に緑へと変わる。

「……以外と長いんだな」

「そりゃそうだよ。別世界に移動するんだ国と国を渡るよりも大変

なんだよ。手段も方法も段取りとかが面倒で、このやり方だつて安全を重視した上で確実的なものなんだ。少しの不備は目を瞑つて貰いたいね

「そーなのか?」

「……なんだか生返事だね。何か気に触つたかい?」

「俺を異世界に送ろうとする、お前の真意が見えないんだよ。それでなんのメリットがお前に出るの?」

「あーそういうこと。君、結構ストレーントに来るね。ん~メリットか、君を送ることが僕にとつてのメリットだと言つておこづかな」

「あつそう。じゃあもう聞かない

「つれないなあ、んじゃはい」

子供は振り向くと俺に俺に一着の服を手渡した。黒い上着に青い皮のジャケットと赤黒いゴワゴワとした長ズボンでちょうど俺の背丈にぴったりと合いそうだ。

「……なんだこれ」

「君の衣装だよ。もしかしてその格好のまま行く気だつたのかい?」

今俺の服装はTシャツにGパンのいたつてラフな格好なわけだが異世界ではおそらく異色なかも知れない。俺は黙つて渡された服を渋々着た。恐ろしいことに服は俺の体型にぴったりと合い着心地はイマイチだが文句はない。

「へえ……なかなかどうして似合つてるじゃないか」

「ありがとよ」

「うんうん。そのなんとも言えない田舎風味が身に染みきつていて何処からどう見ても田舎人だ」

「おつし面貸せ、体育館裏行くぞ」

「まあまあ落ち着いて、コレあげるから

ポイポイと無造作に短剣と小さな縄袋を投げてくる。縄袋の中を見れば数枚の銀貨と銅貨がキラキラを淡く輝いていた。

「その硬貨は向うのお金。銅貨十枚で銀貨一枚。銀貨十枚で金貨一枚つて覚えてくれればいいよ。それで三日ぐらいは持つ筈だから」

「それまでに自分で稼げ、と……でこの短剣は？」

「別に？ ただの普通の剣だけど？」

「え、こ、こはなんか特殊な力の宿つたゴツツイ剣とか、精霊の封印された選ばれし武器とかじやないのか？」

「それでいいならあるけど

ホントにいる？」

「あるのかよ！？ いややつぱいわ、余計な事に突っ込みそ
うだし」

別に俺は冒険がしたいわけであつて勇者とか選ばれし者とかそんな余計な事に突っ込みたいわけではない！ もうそんな厄介ごとは十分に中学で味わつた。あーでも売ればそれなりの金になつたかな。そうかいと子供はやや肩を落とした。……なんでガツカリしてんだ？ 渡したかつたのか、渡そつとしたのか！？

「はいゴーーール！」

立ち止まつた場所の横には洞窟には似合わない真つ白い穴が続いていた。ここが入り口なのだろうか。

「こ、こからは君一人で行つてもらつよ。僕は行けないからね」

「そ、うか。悪かつたな何かと

穴に向かつて歩き出そつとして脚を止めた。そ、ういえ、碌な挨拶もしないままここまで来ていた。

……まあ、最後とはいえ礼儀はするもんだよな。
「俺は比向逸弥。ひむかい イチヤ今までありがとう、さよなら」

「あはっ！ 最後に自己紹介かよ。うーん僕はそうだなクラウンと名乗つておこつ。こちらこそありがとう、そしてさよなら」

ブンブンと手を振つてくるクラウンに手を振り返しながら俺は穴の中を進む。

結局アイツが何なのかは最後まで分からなかつた。でも悪い奴じやなかつた。

「あーそ、そ、そ。今度は死んだら余おつね逸弥君。次に会える日を楽しみにしてるよ」

前言追加。悪い奴じやないが嫌な奴だつた。

進んだ先は白い洞窟といつよりも白い空間と言つた方が合つかもしれない。後ろを振り向いてもある筈のクラウンと歩いた薄暗い洞窟の存在はもはやなかつた。

足を進めてはいるが、前に進んでいるのかどうかもあやふやな状態。右か左かに偏つているのかさえも不明。どうにもこうつたもんは不安を搔き立てられる。

もしかしたらクラウンの言つていたことは全て嘘で、既に俺は死んでいるのかもしないなんて馬鹿なことまで浮かんでくる。

丁度その瞬間だつた。

目が白に慣れて来た途端、赤光が襲つてきた。目の奥を激痛が駆け上がり脳髄を搔き篭つた。

「ぐがあああああああ！」

痛い痛い痛い痛い！目に、目が、目を、目ー、あ、これつてムスカぽいかも！ でも痛いマジで痛い！死ぬこれ絶対死んだ！ 俺死んだ！ ジャあクラウンと再会ー？ 感動の別れから数分後まさかの再会、それすっごく氣まずすぎるー 絶対白い目で見られる！ 今俺痛くて見えないけど！

蹲り、あー俺つて結構余裕があるのかなんて考えながら痛みが引くのを待つ。

一分間だったのか一時間だったのか、痛みでビのへりへり経つたのか憶測も立てられないまま起き上がると、

「え……」

目を開けばそこは森の中だった。全く曲がった見たこともない木や色とりどりの昆虫。クラウンの言つた通りで、俺は本当に異世界とやらに来たようだ。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアーーー！」

だつて異世界じやなかつたら、目の前にいる見たことのない猛獸の説明がつかないもん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9032z/>

中途半端な少年の全力ファンタジー

2011年12月31日23時48分発行